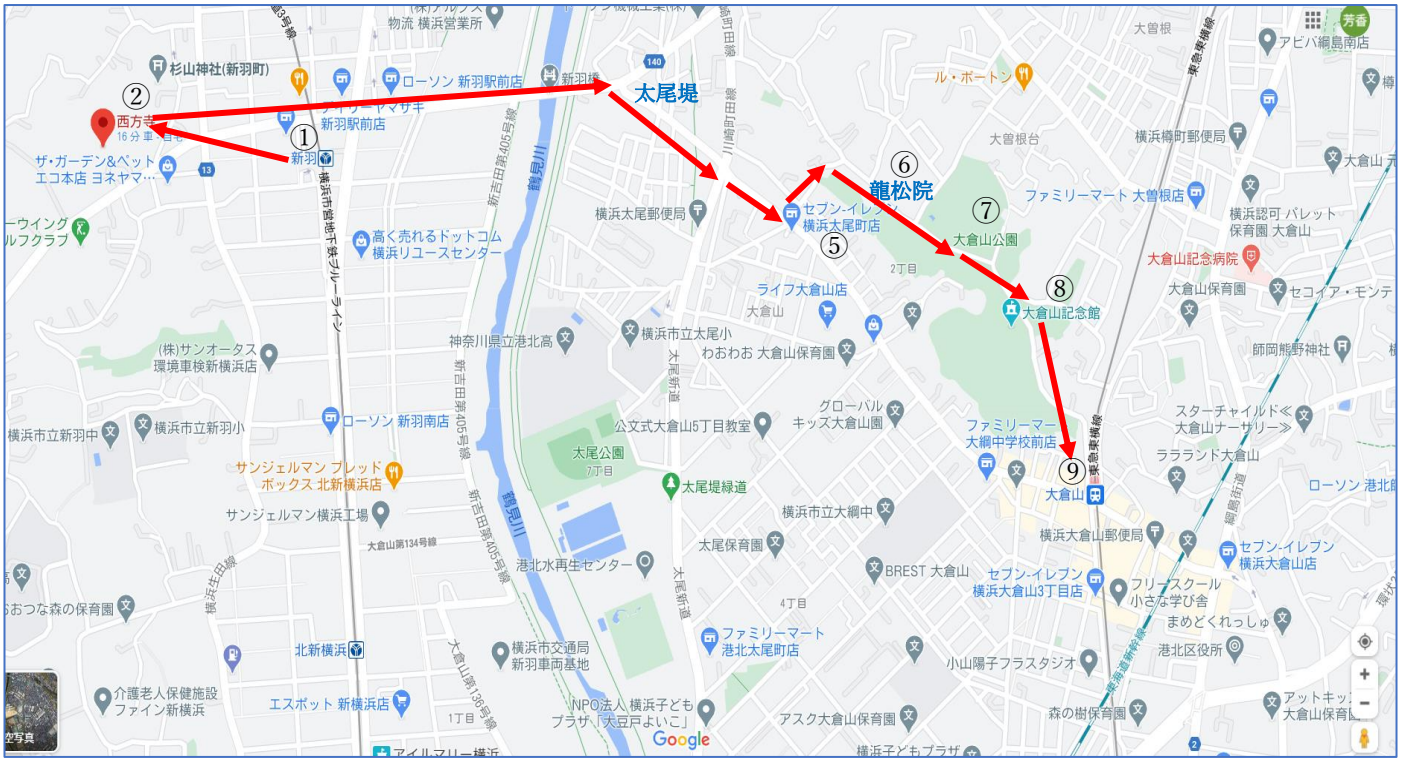

つづきナビクラブ　　新羽・大倉山周辺散策ガイド（地図）

催行日　９月 22 日９：３０新羽駅集合

散策ルート

① 新羽駅⇒②西芳寺⇒③新羽橋⇒④太尾堤⇒⑤セブンイレブン太尾堤店⇒⑥龍松院⇒⑦大倉山公園⇒⑧大倉山記念館⇒⑨大倉山駅

補陀洛山　西方寺について

真言宗　西方寺

横浜七福神、恵比寿大神、旧小机領子年観音、第十五番礼所、武相不動尊、第九番礼所

江戸時代に編纂された新編武蔵風土記稿に「西方寺ハ境内四段五畝御朱印地ノ内、村ノ中央ヨリ少ク北ニアリ、補陀洛山ト號シ安養院ト称ス、開山ハ継眞永禄四年遷化ス、慶安二年二（三代家光の頃）高六石七斗ヲ彌陀料トシテ賜ハレリ」、と記されており、過去帳にも継真法印が当地新羽に於ける開山であるとしております。

江戸時代になりますと、新羽の地は徳川幕府の直轄地で、旗本の領地となり、家康の没後間もない元和二年（1615）には家康の位牌も造立し、御朱印をもらう程の格式ある寺でした。

本堂は八代将軍吉宗時代の享保六年（1721）に二十五世祐算法印により再建されまして、来迎柱には葵の紋が描かれております。新編武蔵風土記稿には「九間二八間東向ナリ」と記され大きさ

は現在と同じになっています。境内には下記二社が記述されていますが、今は無くお像のみ有ります。八幡社　観音堂ノ丘上ニアリ神体木ノ座像長六寸アマリ
天神社　観音堂ノ並ニアリ、コレモ木ノ座像六寸許（寺子屋の本尊）石像の誤りか

西方寺の遺址

笹目谷にあった**西方寺の遺址**は明瞭でありませんが、極楽寺の一院として存在した西方寺は、極楽寺坂切り通しの北側崖上にあり、その付近が古図に示す西方寺の所在と一致し、歴代住侶の墓石十基ほどを残し今も存在し、西方寺跡とされています。そして、新羽町西方寺檀徒の古老の間に「西方寺は極楽寺から船で鶴見川を遡り、新羽の勝地を卜して建てられた」という言い伝えが残されており、また本尊の阿弥陀如来は「黒本尊」として親しまれてきたとのことであります。
ここで西方寺は最初笹目に創建され、後に極楽寺に移建され、更に新羽に移転されたわけです。極楽寺は、古図に見るように多くの堂塔をもつ大伽藍でありましたが、特に施薬院、老病院、ライ病の病棟、馬の病棟などを持ち社会事業もする総合的なお寺でございました。ところが、新田義貞が海から鎌倉に討ち入りし戦場となり、北条氏は滅亡し、お寺も戦禍を被り衰微し、中古図に見られるように堂塔がなくなり、西方寺も新羽に移建され「西方寺屋敷今無シ」と記されている訳です。
鎌倉に幕府がありましたので、各地方から鎌倉に通じる道が出来て、これをかまくら街道と言っていますが、特に新羽は鶴見川を通じて鎌倉との交流が繁くあったものと思われます。極楽寺にあった西方寺が新羽に移される理由として、当時新羽の地は上杉家の領地で、現在西方寺跡に残る墓石群の中に関東管領上杉憲方の逆修塔があることからしても頷けられ、西方寺の霊簿には新羽の地を賞賛して「武蔵國光明耀々黄金峰彌陀観音浄土日域無双在霊地」と記され、阿弥陀如来の境内として優れていると記され、鶴見川は特に上げ潮の時は新羽の「大まがり」あたりまで逆流して船の上りを助け、船の通運に便利であり、鎌倉との文化の交流にも役だっていたことと、新羽の地は鶴見川の恩恵で米もよく取れ、西方寺を受け入れる程に豊かであったと思われます。
要するに西方寺は、笹目、極楽寺、新羽、へと三転し、極楽寺より西方寺が移転されたのは、明応年間（1492）で今から五百年ほど前のことです。それ以前から、現在の境内の処は山の中腹であって裾の平地に保安寺があり、西南の現在観音屋敷と呼称されている所に観音院があり、北東の現在墓地山際に明月院桜池庵がありました

龍松院の概要

曹洞宗寺院の龍松院は、虎石山と号します。龍松院は、小机城主笠原能登守（法名休徹金罷居士）が開基となり、大順宗用（永禄 3 年 1560 年寂）が文殊堂と称して創建、六世明山宗鑑（万治 4 年 1661 年寂）の代に一寺となり、慶安元年（1648）には寺領 9 石余の御朱印状を拝領したといいます。

新編武蔵風土記稿による龍松院の縁起

（太尾村）龍松院

村の西北の谷にあり、禅宗曹洞派小机雲松院末虎石山と號す、開山は大順宗用と云、永禄三年六月朔日示寂、此頃は文殊堂と稱して未だ一寺とはならざりしが、夫より六世を歴て明山宗鑑に至りて一寺となれり、慶安元年十月二十四日九石餘の御朱印を下し賜ふ、かかる功あるに因て、此僧をも亦開山と稱す、萬治四年四月二十三日示寂すと云、開基は當郡小机の城主笠原能登守法諡を休徹金罷居士と云、曾て能登守寇をさけて暫く隣村大曽根村に跡をひそめしゆへ、其頃かの大順と力を戮せて草創せしなり、後天正九年豆州戸倉の役にをもむき討死せり、時にわづか二歳の幼主を殘せしかば、家人伊東藤七なるもの力を盡して彼幼主を傳立、其後東照宮御上洛の時初て拝謁し奉り、都筑郡臺村にて新に二百石を賜ふこれを彌次郎と云、此等の事小机及び隣村大曽根村に詳なれば合せみるべし。客殿十間に六間戌の方に向ふ、本尊釋迦坐像を安ず長一尺六寸許。

寺寶

文殊像一軀。客殿に安ず、此像は開基笠原能登守が持佛なりしを當寺へ納めしと云。古文殊堂と唱へし頃の本尊なりと、獅子に乗たる像にていかにも古物なることは疑ひなし、長一寸八分許作詳ならず。

不動像一軀。鐵の鑄物にて中に其形を鑄出せし者なり、何れの頃何人の納めしや詳ならず、近村寺尾村の土人は巳が村の地頭諏訪右馬助が納めし所なりといへど、不動の姿の傍に千葉右馬介といへる文字見ゆ、しかるを右馬介とあるにより、只名のみをもてかく牽強するは恐くは非なるべし、されど當所にては是非ともに其来由を傳へざれば、今よりは辨じがたし、因て其圖を上にのせて後の考を俟のみ。（新編武蔵風土記稿より）

大倉山公園（横浜市）

敷地 6.9 万平米 (=6.9ha)。うち 1.1ha の梅林には約 20 種 150 本の梅が植えられ、観梅の時期には多くの人出がある。

沿革

- 1931 年（昭和 6 年）-東京横浜電鉄 (現: 東急電鉄)が集客のための沿線開発の一環として、隣接する龍松院の地所を買収。「太尾公園」と名付けて梅林を整備。
- 1932 年（昭和 7 年）-大倉邦彦が大倉精神文化研究所を開設。
- 1934 年（昭和 9 年）- 「大倉山公園」に改称。
- 1981 年（昭和 56 年）- 横浜市が大倉精神文化研究所一帯の敷地を取得し、建物の寄贈を受ける。
- 1984 年（昭和 59 年）- 大倉精神文化研究所の旧所有地を整備して横浜市大倉山公園が開園。
- 1986 年（昭和 61 年）- この年までに東京急行電鉄所有の梅林を買収し、整備の上 1989 年（平成元年）大倉山公園の一部とした。

大倉山記念館の概要

実業家で後に東洋大学学長を務めた大倉邦彦（1882-1971）により昭和７年（1932）「大倉精神文化研究所」の本館として創建されました。
昭和５６年（1981）横浜市が寄贈を受け、大改修のうえ建物の保存を図るとともに、昭和５９年（1984）横浜市大倉山記念館として生まれ変わり、平成３年（1991）には横浜市指定有形文化財に指定されました。
開館以来、１万人以上の入場者を集める「大倉山秋の芸術祭」、こどもの日にちなんだ「こどもフェスティバル」、１２月の「小さな丘のメリークリスマス」、など地域に密着した催し物が多数行われる文化施設として市民に親しまれています。
また、ギリシャ神殿様式のピロティー、昭和初期の雰囲気を残す第５集会室、神社建築の木組みを取り入れたホール、エントランスなど、映画やテレビのロケ地としても数多く活用されています。

創立者　大倉邦彦

明治十五年（一八八二）四月九日、素封家江原（えはら）貞晴の次男として、佐賀県神埼郡（かんざきぐん）に生まれる。昭和四十六年（一九七一）七月二十五日、八九歳で没する。号は、三空居士（さんくうこじ）。
明治三十九年（一九〇六）、上海の東亜同文書院（とうあどうぶんしょいん）商務科を卒業後、大倉洋紙店に入社。明治四十五年（一九一二）、社長大倉文二（ぶんじ）の婿養子となり、大正九年（一九二〇）に社長に就任した。
わが国の教育界・思想界の乱れを憂えた邦彦は、私財を投入して東京の目黒に富士見（ふじみ）幼稚園を開いたり、郷里の佐賀に農村工芸（のうそんこうげい）学院を開設したほか、昭和七年（一九三二）に大倉精神文化研究所を開設した（昭和十一年に文部省所管の財団法人として認可される）。邦彦は、所長として研究所の運営・指導にあたり、各分野の研究者を集めて学術研究を進めるとともに、精神文化に関する内外の図書を収集して附属図書館も開設した。また、昭和十二年（一九三七）、東洋大学学長に就任し、在任は二期六年にわたった。
昭和二十年（一九四五）、Ａ級戦犯容疑で巣鴨プリズンに拘禁されたが、昭和二十二年に嫌疑がはれて釈放され、二十七年に研究所理事長兼所長に復帰した。
昭和三十三年（一九五八）、タゴール記念会の理事長に就任し、昭和三十六年には大倉洋紙店会長となり、三十七年の皇學館大學の創立に際して学事顧問となった。三十九年から開催された大倉山座禅会では、その指導にあたった

大倉山記念館の建造物

昭和７年（1932）「大倉精神文化研究所」の本館として創建されました。
設計は、北海道銀行本店、横浜正金銀行東京支店など重厚で格調高い建築を数多く手がけ、日本建築史に大きな足跡を残した古典主義建築の第一人者、長野宇平治（1867-1937）です。
研究所の設計をするにあたり、「東西文化の融合」を掲げた大倉邦彦の理想に深く共鳴した長野は、古典主義にとらわれることなく、古代ギリシャ以前の”プレヘレニック様式”という世界的にも希少な建築様式を用いたのみならず、東洋の意匠も取り入れ、まさに東西文化が溶け合った独特の様式美を持つ建造物を創り上げました。